

指導教授推薦文

論文等テーマ アメリカ企業の女性活用の進展

著者名 染谷真己子

染谷君の論文「アメリカ企業の女性活用の進展」はこれまでの同君が続けきた研究の一貫である。最近のアメリカ企業ではヒューレット=パッカード社のフィオリーナ女史に代表されるようにフォーチュン・ランキング500社に入っているような会社のトップにつくような女性が出てきており、アメリカ社会も大きく変化しているように考えられる。

同君がベースにしているロザベス・モス・カンターの『企業のなかの男と女』が出版されてから30年の年月を経てきたが、状況はどのように変化してきたのであろうか。日本はアメリカ合衆国以上に遅れているが、同じような数の問題だけで考えてよいのかどうかは疑問である。

換言すれば、重要な意思決定に参画する女性が組織のなかでどのように増えているかであり、このような研究を進めていくためには企業内部の情報を得なければならず、この意味では事後的な判断にならざるをえない。

このような難しさをかかえる問題であるので、どこまで解明することができるかは今後の同君の研究を待つしかないし、この分野でも研究に期待したものである。

現在の企業情報の状況を考えれば、課題はいろいろ残されているが、多くのニュースに接し、カンター研究を超えて、今後の女性の活躍に道を切り開くような研究になることを祈るのみである。

2007年10月31日

推薦者（指導教授） 武内 成

論文等テーマ 中国における外国会社名の研究

著者名 左 咏梅

左咏梅君の論文「中国における外国会社名の研究」は中国の工業化とともに海外から進出してきている企業名の研究である。日本の場合には欧米の会社にはカタカナを使用して表現することが一般的であるが、中国の場合にはすべての欧米の会社に漢字を当てて表現している。

このような研究は最近、多く見られるようになっており、中国の場合には社名の表

記によってよいイメージを与えるし、逆に悪いイメージの場合はその会社の将来的な発展にも大きく影響するようである。

左君の論文は欧米日の企業、約2数十社に及ぶ研究であり、これを意味上の問題、発音上の問題などに区別して分類している。これらの会社の企業業績がその後、どのようになっていくかは今のところ不明であるが、中国語文化圏独自の問題があり、13億人の国民を持つ国家への進出には避けて通ることのできない問題でもある。

問題があるとすれば、これらの会社の企業業績との比較をすれば、より客観的なデータが手に入ることになると思われるが、それは同君の今後の研究に期待したいところである。この社名の研究は今後、経営学の多くの概念との比較の研究にもつながるものである。

以上のような点から同君の論文はそれなりの価値を持つものであると考えられる。

2007年10月31日

推薦者（指導教授） 武 内 成

論文等テーマ 認識的モダリティの再定義
—「だろウ」と「推量」から見る認識的モダリティ—

著 者 名 蔣 家 義

蔣家義君は修士論文「ダロウと『吧 ba』の対照研究—言語行為論の立場から—」(2006年9月)において、言語行為論の立場から新たな分析法を開発しつつ両形式について分析・考察を進め、日本語に11種類の「ダロウ」を、中国語に15種類の「吧 ba」を認め、それぞれの発話意味と発語内効力（6要素）を明らかにし、両形式の異同を論じた。

続く本論文集前号（第4号、2007年3月）での論文「言語行為論による語気助詞の分析方法—『吧 ba』を例として—」において、修士論文で開発した言語行為論的分析法を、中国語の語気助詞そのものの新たな分析法へと発展させ、語気助詞の意味の分析と記述の方法を前進させることに寄与した。

蔣家義君は一貫してモダリティ分析の方法論の開発に取り組んでいる。今回の論文においては、日本語学と英語学におけるモダリティの先行研究から特に認識的モダリティの代表的定義をいくつか取り上げ、異同を論じた上で、相違点を越えた、高い一般性をめざす認識的モダリティの再定義を提示している。

一般性をめざすために、分析に心理学の基本的概念を導入することを試み、その方法により認識的モダリティの非常に重要な表現「だろウ」を分析することにより、先行研究での「推量」の扱いの問題点の克服を試みた。その結果「だろウ」の特質と「推

量」のとらえ方が新たに記述されることとなった。

蒋家義君の開発しつつある方法は新しいものであるだけに、現時点では適正に評価しきれない部分もある。今後この方法で認識的モダリティの全体像が描かれることが期待されるが、いましばらくは努力を見守っていきたいと思う。

本論文集に載せることにより、この新たな試みに対する識者の温かいご指導をいただくことができれば幸いである。

2007年10月31日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ ブログにおける言いさし文

著 者 名 林 茜 茜

林さんの論文は、国際文化交流専攻の修士論文として提出されたものを基に、書かれたものです。

その後、取捨選択され、更にその後の研究を附加し、深化させたものです。

林さんの研究は、いわゆる日本語の言いさし文、接続助詞などで終わってしまい、陳述の助動詞を伴わない、文のことであり、言いさすことによるモダリティーをさまざまに持っています。

ただ不完全文とみなされ、あまり研究の対象になったことのないものでもあります。

林さんはそうした未開拓の領域にかかんにいどみ、ユニークな対象について、非常にオーソドックスな手法、正統的な方法で分析し、極めて理論的な結論を得ました。

各種、接続助詞による言いさし文のデータを多量に収集しそれらについて綿密に分類し、その用法について整理しました。

大学院論集として、十分にその内容、方法として価値のあるものと認め、ここに推薦いたします。

2007年10月31日

推薦者（指導教授） 金田一 秀 穂

論文等テーマ 中国語空間辞“上”の意味拡張及びその動機づけ

著 者 名 韓 涛

韓涛君は、国際文化交流専攻の修士論文を提出し、今回はそれをもとにして、更に

大幅に加筆訂正し、この論文を作成しました。

韓君は、認知言語学の最新の知見を応用し、“上”のアーキタイプを中国語の中に認め、それがどの程度応用されるか、大変興味深い結果を出しました。

認知言語学は普遍性と分類学という性格をもちますが、韓君は英語、日本語それに中国語の三言語についてタイポロジーを作り出し、大変新しい結論を得ました。

その斬新性そして、将来性という点で、大きな期待がもてます。

大学院論文集の一編として、十分その価値があり、是非共この論文を載せていただきたいと思います。そのことにより、この論文集の価値があがるとさえ信じます。

高く推薦いたします。

2007年10月31日

推薦者（指導教授） 金田一 秀 穂